

「死の谷」を戒名につけた父

東京都 鈴木 恵子

八年前に九十五歳で他界した夫の父は用意周到な人だった。元気なうちに墓を建て、自分と母の戒名まで考えていた。

母の戒名には、生まれ育った村を流れる川の名「最上」が、父のそれには、旧ビルマ北部の土地の名「フーコン」が入っていた。

父は趣味の釣りやお囃子太鼓を楽しみ、家族を大切にする優しい人だった。いつも穏やかで、声を荒げたり、人を悪しざまに言ったりすることなど決してなかった。毎年秋に静岡県三島市で行われる戦友会に参加するのを楽しみにしていた。

私は一度だけ靖国神社で戦友に会う父に付き添っていったことがある。大鳥居の横の桜の木の下がいつもの待ち合わせ場所だそうで、そこに向かうとすでに戦友さんはいた。背の高いおじいさんだった。二人は並んで本殿に向かって最敬礼をし深々と礼をした。その長いこと、姿勢のよいこと。八十代の二人はまさに日本兵だった。

父は時々戦地での話をしてくれた。

「フーコンはたいへんな所だった。こんな大きなヒルがいて、吸いつくんだよ」

親指を立てながら眉をひそめていた。私は父を通して初めてフーコンを知った。

「死んだ人のほとんどは、マラリアや赤痢や栄養失調、つまり餓死だ」

「一番仲がよかった戦友もマラリアで死んじゃったよ」

「おれもいつ死んでもおかしくなかったな」
もっと真剣に聞いてあげればよかった。

その後、九十三歳からの二年間、父は本当に苦しんだ。歩けなくなる、立てなくなる、座れなくなる、自分の唾液にもむせる、声が出せなくなる。だんだん衰えていき、生きる全てに人の手を要する自分。

「こんなになって情けない」

と、涙していた。でも投げやりになることはなかった。亡くなる前年までインフルエンザの予防接種を受け、栄養ドリンクをむせながら飲んでた。冬の寒い日、リハビリの先生と公園へ行き、冷たい鉄棒につかまって足踏みをしていた。最期まで生きぬいた。

父が亡くなり、菩提寺のご住職に正式に戒名をお願いした。父が希望した「フーコン」の入った戒名はどうなるのだろう。どんな漢字になるのだろう。まさかカタカナのままということはあるまい。

ご住職が選んでくれた「フーコン」は「富懇」だった。周囲の人に懇ろな優しい心をたくさん与えてくれたという生前の父の姿をその字に託してくれたという。いい漢字を選んでくださった。父は自分で考えた通りの戒名を得た。

「おじいちゃんの願いがなくなってよかったね」

私たちは安心した。

しかし、私はずっと疑問に思っていた。なぜ「フーコン」「富懇」なのだろう。つらい二度と思いたしたくない土地ではなかったのだろうか。

私は父の思いに迫るべく、父や戦友の残した手記をひもといてみることにした。

父の手記にはフーコン作戦の初期にマリアアで亡くなった親友への思いが切々と綴られていた。五歳の娘に一度も会わずに死んで、どんなに無念だったろう、と。他の人の手記には、河を渡る時に筏を作り歩けない人を乗せたとか、衛生兵から貴重な薬をもらい命をつないだなど厳しい状況下でもお互いを助け支え合ったことが記されていた。苦楽を共にした仲間の存在が大きかったことが伝わってきた。

部隊の約七割が死んだフーコン作戦とその後を父は奇跡的に生き延び、終戦を迎えた。二十歳から二十七歳までの青春時代を戦地に捧げたのだった。

現地の言葉で「死の谷」を意味する「フーコン」は父にとって、青春を捧げ、苦しみを乗り越えた自分への誇り、戦友との友情、亡くなった戦友と敵兵への哀惜と鎮魂、それらを象徴するものであり、その後の人生の指針となるものだったのだ。愛し、懐かしむというより忘れてはならないものだったのだ。生きている間も死んでもそれと共にあるとうと決めていたのだろう。別の戦友の文にある「人間が人間を殺す戦争は、いかなる理由があるにせよ、すべきではないと、声を大にして全世界に訴えたい」という思いもあったのかもしれない。そうだ、「フーコン」は平和への決意の言葉でもあったのだ。

今、父は母と共に「富懇」「最上」の名で静かに眠っている。

墓前に手を合わせながら、私は思う。父の人生を決して否定するわけではない。素晴らしき父だった。でも、戦地の名が深く刻み込まれた人生は哀しい。もう二度と誰の上にもありませんように、と。

「富懇」は私にとっても平和への決意の言葉となった。

へ 一般の部 優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞 へ

父からの贈りもの

福岡県 金川 久代

小学校一年生の音楽の時間に先生が「好きな楽器に触れて音を出してみよう」と言った。皆、我先にと興味ある楽器の前に集まった。私は友達と木琴を選んだ。木琴に触れるのは初めてだった。片手でバチを持ち、ドレミの音階を叩いた。軽く叩いただけなのに明るく弾んだ音が出た。感動した。私と交代した友達は両手にバチを持ち、「みかんの花咲く丘」を上手に演奏した。当時、ラジオからよく流れていて、誰もが一度は耳にしたことのある曲だった。他の楽器に触れていた皆も、その演奏に聴き入った。終ると先生も一緒に拍手した。学校から一緒に帰りながら「すごかね。何ですぐにできると」とたずねると「家のピアノで弾いた事があるけん。ピアノより木琴の方が易かとよ」と答えた。友達がいつもより眩しく、大人に見えた。

家に木琴があったら楽しいだろうな。いつでも好きな時に叩けてと、木琴が欲しくなった。でも、生活が苦しく、私達の為に家の狭い仕事場で夜遅くまで働いている父に、欲しいとは言えなかった。

次の日学校から帰ると、いつものように、仕事場の父に声をかけに行った。その時、隅の方に置いてあったベニヤ板の切れ端を見つけた。「父さんこれ貰ってよかね」と聞くと、「角だけがせんように」と言いながら手渡してくれた。

その日は、いつもより早く宿題を済ませた。そして、ベニヤ板にクレヨンで木琴の絵を描いた。バチの代りに竹の定規で叩いてみた。壁を叩いたような音だったが、木琴を演奏している気分になった。楽しかった。夢中で叩いていると、いつの間にか私の後ろに立っていた父が、のぞき込みながら「楽しそうな音がすると思ったら、木琴やね」と言った。私が「木琴じゃなか。ただのベニヤ板」と言うと「ちゃんとリズムがとれていて上手か」とほめてくれた。

学校から帰って宿題を済ませると、毎日のように、ベニヤ板の木琴を叩いた。両手にバチを持ち、叩ける曲も次第に増えた。

ある日父が「今から川原に竹をとりに行く。一緒に行こう」と誘った。

家の近くには、大きな川があり、川岸には大人の背丈より高い竹が生えていた。

七夕には、若い竹の枝を切ってきて七夕飾りを皆で作った。こどもの日には、大きな笹の葉を取ってきてチマキを作っていた。

「今日は何でとりに行くと。何をすると」とたずねると「内緒」と答えなかった。兄とすぐ下の妹も一緒に、父の後をついて行った。父は、いつもより大きい竹を選び、小枝や葉を鎌でおとした。それを皆で担いで帰った。

何をするのかずっと気になっていた。

十日程過ぎた頃、学校から帰ると父が、大きな風呂敷で覆った物をテーブルの上に置いて待っていた。開けると、同じ長さの二本の垂木の上に、厚さ一センチメートル、巾二センチメートル程の、長さの異なる竹が、長い順に左から右へ並んでいた。垂木と竹の間には、見覚えのある父のフェルトの帽子を丸く切り抜いて作ったクッションが敷いてあった。

「わあ木琴だ」と歓声をあげた。羽子板の羽の黒い実がついた二本の細い竹の棒を渡しながら「叩いてみて」と言った。覚えた曲を叩いた。ベニヤ板の木琴とちがいに曲になった。「すぐ演奏できてすごい。いつも練習していたからね」と父が嬉しそうに言った。「この木琴は私のと」とたずねると、「皆にも作った。いつでも好きな時に叩いて。竹で作ったので竹琴だけ」と笑いながら言った。「そうか竹琴か」と私もつられて笑った。

夕方、兄が学校から帰ってくると、真つすぐな竹にいくつもの穴を開けて作った笛を渡した。「この間の竹はこれを作る為だった」と兄が言い、すぐに吹いた。二人の妹には、木を丸く切り抜いて作ったカスターネットを、使ってみせながら渡した。家が急に、賑やかになった。

夕食が済むと「これも作っていた」と父が竹の古い根っ子で作った尺八を持ってきた。そして、口笛を吹くように口をすぼめ「荒城の月」を吹いた。一瞬、シーンと静かになった。

自分達の楽器で、時々家族皆で演奏会のまねごとをした。

七十年前の、物や娯楽の少ない時代に、手作りの楽器は、貴重な遊び道具だった。父のおもいのこもった楽器は、月日がたつと、竹の色があせ、音も変化した。でも、私達の宝物にはかわりなかった。ずっと大切にした。

父が逝って三十年あまり。残してくれたものは、それぞれの子供に合わせて作られた楽器など、形あるものだけではなかった。工夫して生活することの大切さや楽しさも教わった。これらは、父からの最高の贈りものだったと思っている。

父のグンゼ

福井県 伊藤 直子

父の最後の晚餐は、さばの一夜干し、そして油揚げと大根の煮物だった。

父はその日、いつも通りに私の用意した夕食を取り、いつも通りに風呂に入り、だがいつも通りに風呂から出てくることはなかった。

救急隊員によって運び出された時、父の心臓はすでに止まっていた。享年 88 歳。葉桜を小糠雨が濡らす、4 月の肌寒い夜だった。

その日から、父の音の一切が消えた。

午前 4 時。新聞を取りに階段を降りる父の足音が聞こえてこない、その静寂に目が覚める。風の音。天井のきしみ。ふとした音に敏感になった。父がそこにいるのではないかと思った。父の死に、誰よりも父自身がうろたえているのではないかと思ひ、虚空に目をさまよわせ、凝らした。

お父さん、幸せやったかもしれんよ。

あちこちで、こんな慰めの言葉をもらった。庭仕事をしているのを見た、買物袋を提げて歩いていた、など、亡くなる間際の日撃証言を語ってくださる最後に、ピンピンコロリと逝った者への羨望をにじませて。

父に臨終を告げた医師は、急性心筋梗塞で、ほとんど苦しまなかっただろうと言った。納棺師は、よく歩いた人ですね、土踏ましが分厚く、ふくらはぎが締まっていますと言ひ、火葬場職員は、最後までちゃんと食べた人ですね、脂が乗っていましたと言った。

生命体としての父は、幸運な最期を迎えたようだ。慰めを覚える一方で、まだ死ぬ必要のない命だったのだと胸をふさがれた。

後悔がある。あの日、風呂から出てこない父を見に行くタイミングがあと 10 分早かったら、父は助かっていたのではないか。せめて一瞬でも息を吹き返して、さよならくらいは言えたのではないか。

同じ屋根の下にしながら、救えなかった。母の認知症発症を機に、東京から Uターンして同居を始めて、1 年と 4 か月。父の元気に油断をしていた。“いつか”がこんなに突然訪れるなんて。母より父が先だなんて。

日に一度、主を失くした父の部屋に入り、窓を開けて空気を入れ換える。父の死の直後に検死を行った警察官に、「こんなきれいな部屋、見たことない」と言わしめた部屋は、退職公務員らしく、質実で整然としている。

相続手続きに必要な書類は、きっちり揃えてあった。桐箆筒の中には、クリーニング済みのシャツがきまじめに並んでいた。

「何か事^{なんごと}」があった時に、家が散らかっていたらどうにもならんやろ」が口癖で、毎日が終活のごとく片付け魔の父だったが、なるほど、こういうことかと身にしてみた。

子どもの頃から、隙のない父の部屋は近寄りがたかったが、印象が少し変わった。この部屋は、責任という名の堅牢な愛情で家族を守り続けた、父の生き様そのものだ。

不思議な感覚を知った。死が語りかけてくるものがある。生のペールに覆われて気付かなかった、その人の本質が立ち昇ってくる。そして遺された者と逝きし者は、無音の対話をするのだ。余命宣告という執行猶予のない突然の死別の場合は、ことさらに。

10月のぽっかりと晴れた日曜日。父がこの世で最後に身に付けていた下着と、風呂上がりに着るはずだったシャツを洗った。

父は、風呂に入った翌朝、脱いだ下着を自分で洗っていたのだが、あの日の分は脱衣カゴに残されたまま、半年が経っていた。

ごめん、つらくて放置しちゃったよ。心の中で謝りながら、粉石鹸をお湯で溶かす。

下着には、グンゼのタグが付いていた。はやりの機能性下着を試しても、ペラペラであかん、とすぐに戻った。ネット購入を勧めても、地元で買ってやらなど、てくてく歩いて商店街に向かった。その姿を思い出す。

スーツはオーダーで、お直ししながら大事に着ていた。おしゃれな人だったな。家族にも、ステテコ姿なんて見せなかった。

……ああ、あの日、無防備な姿で運び出されて、父はどんなに恥じ入ったことだろう。脱衣所までたった150センチの距離を自力で歩けず、どんなに無念だったことだろう。

せめて、私が見つけてあげられて良かった。喪主になって送り出すことが出来て良かった。そうだ。私はちゃんと、間に合ったんだ。さよならこそ言えなかったけど、父の人生の最後の1年4か月を一緒に暮らした。それは父と私の、かけがえのない蜜月だったんだ。

涙がぼとぼと手の甲に落ちる。父を亡くして初めて、父のために声を上げて泣いた。からりと乾いた父の下着は、きれいにたたんで、父の部屋の桐箆筒に収めた。

何や、始末が悪いなあ。要らんもんは、さっさと処分してしまえや。

父の声が聞こえた気がして、心の中でつぶやいた。

始末をつけたくないんや。わかってないなあ、娘心を、と。

ふるさとの雪は

福岡県 感王寺 美智子

結婚前、初めて鹿児島を訪れ、夫の御両親に、お会いした時のことだ。

「遠かところ、よう来なさった」

やさしい笑顔に出迎えられ、昼食を共にした後、天文館のアーケードを出ると、空から、フワリと、白いものが舞い落ちてきた。

フワリ、フワリ、見上げると、白い花びらのようなものが、ちらついている。

「わあ、雪！」

新潟の雪深い山村で生まれ育った私は、嬉しくなって、空へ手を伸ばし、はしゃいだ。義母が、クスクスツと笑う。義父のオデコに、そのひとひらが、ペタツと貼りついた。

義父は、気づいていないのか、コホンと咳払いをし、真顔で言った。

「美智子さん、こいは雪でなか。桜島の屁じゃ」

みんなが、ドツと笑い出した。新しい家族の笑顔に囲まれ、ポカンとする私。雪と思っただのは、桜島の灰だった。

義母の長い睫毛にも、ひとひら、とまった。

「新潟は、ごつつ、雪ば降つとね？」

瞬きをする、その横顔が、とても美しい。

「ええ。私のふるさとは、家も木も、真っ白に埋もれてしまいます。2階から出入するほど、雪深いですよ」

家の入り口の貯水槽、玄関まで並ぶ銀杏の木、2階までかかる長い梯子、すべてが分厚い白い雪を着る。

東京での生活の慌ただしさにかまけて、もう何年も帰っていなかった。母は、元気でいるだろうか。睫毛に雪を貯め、せつせと、雪かきをする、母の姿が、義母に重なった。

「大人は、雪掻きで大変です。でも私ら子供は、頬つぺた真っ赤にして、雪ん中、転げまわってましたけどね」

「行って見たか。私も、雪ん中、転げてみたかね」

「はい、是非、来てください。いつか必ず、連れていきますね」

しかし、人生は慌ただしく、その約束を果たさなのまま、何十年も過ぎてしまった…

義母を、ゆっくり、ベッドから起こす。

「お義母さん、お風呂、一緒に入りましょうか」

義母は、立ち上がろうとして、震える細い手で、私の腕を、痛いほどにギュツと掴む。

支えられようとする力は、時に、支えようとする力の方が、負けそうになるほど強く感じ、タジタジとする。

義母は、数年前、病を患い、ほとんどベッドの上の生活になってしまった。人生は、いつか必ず、なんて約束を、のんびり待ってはいないのだ。外出も難しく、私が連れて行けるのは、新潟どころか、家のお風呂場か庭先くらいになってしまった。風呂場まで、一緒に、一歩一歩、歩く。ゆっくり、ゆっくり、歩く。それが今は、義母の旅だ。

「はい、着きましたよ」

そろりと、風呂場の椅子に座らせ、ぬるま湯を肩から流すと、義母は、不思議そうな目で私を見た。

「はてえ。私に娘は、いもしたか？」

「はい、いもしたよ」

私は、きっぱりと答え、スポンジで、石鹸を泡立てはじめる。腕が痛くなるほど、懸命に。洗面器から溢れるほど泡ができあがる。その泡で、義母の肩を、胸を、腕を、爪先まで、全身を包み込んだ。

「はい、お義母さん、雪だるま！」

幼い頃、新潟の母が、よく、そうしてくれた。義母を、新潟へ連れて行くことは、できなくなったが、せめて、このお風呂場で、ふるさとの雪を、作ろうと思った。

「雪、冷たくなかね」

義母は、子供ののように、目をクリクリさせる。

「はい、雪は、あったかいんです」

義母は、ピタッと動きを止め、風呂場の天井を見上げた。まるで、雪が降ってくるのが、見えているように微笑む。

柔らかな泡が、義母の体の上で、プチッ、プチッと、音を立て、弾け消えていった。

フワリ。風呂場の小さな窓から、桜島の灰が、舞い込んできた。

「お義母さん、ほら、桜島からも雪が降ってきましたよ」

灰が、石鹸の泡に、溶け込むように、落ちる。

「きれいかね、雪」

「はい、きれいです」

遠く離れていても、ふるさとの雪は、ここにある。幼い頃、母と一緒に見た雪を、遠く離れたこの場所で、義母と一緒に見て生きていく。ふるさとの雪は、どこで暮らしているよりも、いつも、あたたかく、私の心に降り積もる。そして人生を潤す水となり続けられる。

同級生の思い出

神奈川県 杉山 七恵

小学校の同級生に梶野くんという男の子がいた。宿題はやらない、授業には無関心。先生には反抗的な態度で、中学や高校の危険な先輩ともつるんでいた。父親と二人で暮らしていたが、あまり大事にはされていないようだった。遠足や運動会のお弁当はきまって先生が代わりに用意していたし、何より覚えていないようだった。黄色い縞々のセーターとJOKERというロゴが入ったトレーナー。毎日同じ二着を交互に着て来る彼は、いつも両手をボロボロの袖口にすっぽりとしまい込んでいた。

一方、私は毎年学級委員をやるような優等生だった。今思えば単に世の中を知らなかったのだが、あの頃は物事の善悪に迷いがなく、正義や秩序が明確に見えていた。ただ、周囲の評価と内側の実態に不穏な乖離があることに、ひとり不安を感じていたように思う。

私たちが通う小学校では、月に一度、生活指導チェックが行われた。抜き打ちで全校生徒を体育館に集め、身だしなみを点検する。そのチェック項目の一つに「爪が清潔な長さに保たれていること」というのがあり、梶野くんは毎回これにひっかかった。そして、違反が認められた生徒に注意して改善を促すのは、学級委員である私の役目だった。

ある日、私は意を決して、学年一の不良少年と対峙した。

「か、梶野くん！」

「なに」

「爪切ってよ」

「なんで」

「なんでだっけ？ えっと…そうだ。」

「不潔だから！」

彼はまるで宇宙人にでも遭遇したかのようなポカンとした表情で私を見つめた。

「だって、おれんち爪切りねーもん」

「そんなわけないじゃん。お父さんに聞いてみなよ」

「やだよ」

こうして交渉は決裂した。

しかし、使命感に燃える優等生はめげなかった。翌日、自宅から持参した爪切りを握りしめて、再び廊下で彼を呼び止めた。

「ねえ、梶野くん」

「なんだよ」

「手、出して」

「なんで」

「爪切ってあげるから」

爪切りを渡すだけでもよかったのに、どうして自分が切ると申し出たのかは謎だ。でも、もっと奇妙だったのは、彼がトレーナーの袖から手を出し、素直に私の要求に応じたことだ。西陽が差し込む放課後の教室で、私はゴミ箱にまたがって座る梶野くんの爪を切った。他には誰もいない空間に、パチンツ、パチンツと乾いた音だけが響き渡る。他人の爪なんて切ったことがなかったから、ものすごく時間がかかった。でもその間、彼は文句も言わず黙って手を差し出していた。

その後、彼は着々と不良街道を突き進み、いわゆる地元のワルとして名を馳せたのち、十六歳の夏にバイク事故で死んだ。

同じスタートラインに立ち、同じ箱の中から、同じ景色を眺めていた。全部同じだったのに、彼は去り、私は二十年以上も余計に生きている。

来年で四十歳。あの日、帰りがけに梶野くんがつぶやいた「あんがと」という小さな響は、もう一人の証人を失った記憶の中で、少しづつ不確かになっていく。そして、朝の通勤ラッシュに押し潰されながら、一日の終わりにビールを飲みながら、時々ふと「あれは夢だっただろうか」と考える。

あのとき幼い二人が互いに差し出していたもの。それに意味など与えないように、頭の中で徒な言葉を一つずつ取り除いていく。同情、好意、寂しさ、諦め、自己愛。そうして静かに目をつぶれば、強烈なオレンジ色の光だけが、ただ美しく心いっぱい広がる。

忘れられない旅

仁愛女子高等学校 佐々木 萌

私には数々の思い出がある。コンサート会場での思い出、友達との思い出……。私がこれから生きていく上で、私の核になっている思い出がある。それまでの私を変えた、「一生の宝物」と言えるものだ。六年も前のことだが、忘れたことは一度もない。

「遍路」。私と姉は小学四年生の時に、父との自転車野宿旅を経験している。1/2成人式のイベントだ。私は目的地を広島県の宮島としたが、台風襲来により姫路で断念。小学五年生の時に、行き先を四国に変えて再度出かけることにした。四国にある八十八カ所のお寺を参拝し、納経所で御朱印帳に朱印を頂き、御朱印代として三百円を納める。

四国までは車で行き、駐車場に車を止め自転車を組み立てる。荷物を移し替えていざ出発。自転車での野宿旅行が始まった。

真夏の旅である。道路の上はまるでフライパン。しかもお寺の多くは山の上にある。何日もしないうちに、私は「疲れた」「休みたい」とこぼすようになった。しかし、前を走る父の自転車には二人分の荷物が載っている。テント、寝袋、二日分の水分、食材、着替えなど。そのことに気付いた後も「私の荷物は自分で持つよ」とは言えなかったが、「疲れた」を口にしなくなった。

連日三十五度を超える日々。体温はきつと四十度を超えていると思うくらい、熱くなっていった。そんな中、私が初めて「お接待」を受けたのは、五番札所、地藏寺だった。朝から太陽に照らされ、三百六十度全方向からスポットライトを浴びているような日だった。汗が出て、肌の日焼けが目立つ。保冷用のホルダーに入れたペットボトルのお茶が、すぐに生ぬるい飲み物に変わっていた。

ヘルメットに汗拭きタオルを着けたまま参拝をすませ、納経所に向かう。クーラーの効いた納経所は、そこそ極楽だった。

「涼しい！」思わず言葉が漏れた。御朱印を頂き、御朱印代三百円を出す。ところが受付の女性は、「はい。おつり」と言っただけで私の手にお金を握らせてくれた。訳が分からずにいると、

「これで冷たいジュースでも買いね」

「でも、……」と言いかけたとき、父が、「ありがとうございます」と言っただけで納経所を出た。私も小さく「ありがとうございます」と言っただけで父に続いた。納経所の横の休憩スペースにある自販機で買った物は、今でも覚えている。ナタデココ入りの炭酸グレープ。

このとき、父が教えてくれた。遍路を続ける人の思いを支えるために、物やお金を渡してくれる「お接待」というものがあること。お接待してくれる人の「今はお寺にお参り行けないから、私の分もお参りしてきてね」という思いを受け取っていること、を。

他にもたくさんのお接待を受けた。ある時私達を追い越していった車がスーパーに入っていた。数分後、その車が再び追い越していった後に止まり、運転手が降りてきて私に飲料水を四本もくれた。自分の買い物とは別に、私達に渡すために買い物をしてくれたのだ。その人は、「頑張つてや」と言つて笑つてくれた。すごく嬉しかった。

人と話すことが苦手だった私を、人と話すことが好きな人に変えたのは、四国でたくさんの人から声をかけられ、「ありがとう」を返し、納経所などで四国の人と会話を重ねた経験があったからだと思う。

父の仕事上、五・六年生の二年かけて四国を回った。二年間で一番驚いたお接待。

結願の寺、大窪寺から山を下りてしばらく走ると小さな温泉がある。五年生の時、家に戻る前に立ち寄った。そこで一緒にお風呂につかった地元のおば様としばらく話し合った。何をしているのか、何が好きかなど。一日だけの風呂友。そう思っていた。六年生の夏、全ての寺を回り終え、旅の汚れを落としに、と再び立ち寄った。「もしかして萌ちゃん？」突然声を掛けられた。あのおば様だった。一年前のわずかな時間、打合せ無しで訪れた温泉。一年前の思い出と、新しい思い出を一気に頂いたお接待。

四国はとても不思議な場所、私の第二の故郷である。人々は優しく、張り詰めていた緊張がなくなり、ふわっとした感じになる。まるで、雨上がりの虹を見た時のような。

四国から帰ってしばらく後、兄や姉に言われた。「優しくなったね」そう言えば、人と話すのが苦手だったのに、話せるようになっていく。感謝の言葉や謝罪の言葉も言えるようになった。

四国遍路は私の「一生の宝物」であり、思い出すだけで、自分が変わったことを思い返し笑ってしまう。結願後毎年四国を訪れていたが、ここ二年間は行けていない。だからこそ、行きたいという思いが強くある。遍路も、もう一度回りたい。その時は、当時の私のような思いで回っている人に、「そんなに気負わなくて良いよ」と声を掛ける立場として。

〈 高校生の部 優秀賞・げんでんふれあい福井財団賞 〉

幸福の時間

京都教育大学附属高等学校 白石 奈々

「もう、目え開けてええで」

父に言われて固く閉じていたまぶたをそっと開けると、そこは、遙か彼方に地平線をのぞむ、一面の青い海を見下ろす崖のてっぺんだった。崖に打ち寄せる白波、木々の深い緑。突き出た半島に見える、常神岬灯台。

常神へと向かう福井県道二一六号は曲者だった。ぐにゃぐにゃと何度も曲がり、アップダウンも大きい。小さな頃から車酔いのひどい私が編み出した必殺技は、「目を閉じる」ということ。母も隣で洗面器をかかえて青い顔をしている。京都から一人で車を運転してくれていた父は、そんな私たちを気遣って、いつも目を開けて良いタイミングを教えてください。公営駐車場に車を停めてからも、具合の悪い私たちの代わりに荷物をかかえて狭い集落を何度も往復してくれた。

常神は、澄んだ美しい海にたくさん魚が泳ぐ、「常に神がおわす島」。点在する無人島。寄せ合うように崖に沿って立ち並ぶ家々。たった一軒しかない雑貨屋でアイスを買って食べると、ようやくひと心地ついた。天然記念物の、巨大なソテツを囲むように建てられた宿の部屋は清潔で、窓を開けると潮の香りがする。やさしい笑顔の宿の主に出迎えられて、父が挨拶を交わしている。私はとたんにソワソワし始めた。早く海に行きたくて仕方ないのだが、船で無人島まで送ってもらい、釣竿を出したら、生き餌をつけて海に垂らす。波の音を聞きながら、深く息をすると、目と耳だけでなく、身体の中まで海色に染まった。幸せな時間。父がシュノーケルをつけて海へ潜り、釣りのポイントを教えてくれる。家族三人が食べる分の魚だけを釣ると、私もシュノーケルをつけて沖へと泳いでいく。ブイのさらに向こうで、父が手を振っている。

夕食は豪華絢爛だった。海の幸がこれでもかと並び、そのどれもがびっくりするくらい美味しい。これ以上、食べられないと思っても食べられる不思議さ。父も母も私も、この幸せな時がずっと続くと信じていた。

「今年は台風で無理そうです」私が中学一年生の時、定宿の主から電話があった。この常神は県道二一六号線が通行止めになると、陸の孤島になってしまう。宿の主を心配しつつ、「来年を楽しみにしています」と、母が答えていた。

これ以後、私たちが常神を訪れる機会は来なかった。本当は、その頃から少しずつ変わっていたのだと思う。父が所属していた開発課から管理課に異動になり、「なんで……」と家で愚痴るようになった。ちょっとしたことイライラして、母や私に当たるようになった。母も私も、父が家で安らげるように気を配ったが、父の心を癒やすことはできなかったよう

に思う。

そんな時、塾に行き始めた私を心配して、父がスマホを買ってくれた。友人たちはスマホをコミュニケーションの道具として使いこなしていたが、私は緊急時の連絡手段としてしか使わなかった。父に、「スマホに夢中になって、勉強がおろそかにならないように。」と言われていたせいもあった。しかし、同時にスマホを買った父は、初めてのスマホにのめり込むようになった。平日は帰宅後、深夜二時頃までスマホでゲームをするようになった。仕事のない日は、ほぼ一日中。スマホを手持ったまま食事をし、布団に入る。外出を厭い、食事も入浴も短時間。会話は減り、最低限度のことしかしなくなった。ゲームに集中できないのか、私が夜勉強をしていると文句を言うようになった。私の閉めた洗面所の扉が、ほんの少し開いているのが気に入らなくて、激しく注意されたこともある。――自分は、電気をつけっぱなし、戸を開けっ放しでいるのに。

果たして、スマホやゲームが父の癒やしになっていいのか、私にはわからない。しかし、眉間に皺を寄せてスマホで夜遅くまでゲームをする父を、幸せそうだとは思えなかった。そう、幸せな時間とは、常神にいた時のような時間を言うのではないだろうか。

あれから三年。父が十年前に特許申請したものが、発明協会で表彰された。表彰状を手にした父は、笑顔で誇らしそうだった。「たいしたことないけどな」と、言う父を、母と私が褒めると、照れくさそうにしていた。そして、ほんの数分だが、父が少しずつ食事の時に会話をするようになった。

常神は、幸せな子供時代を過ごした父の思い出の土地だった。裕福だった父とその家族は、毎年この常神で夏を過ごしていたらしい。三十年以上経っても、変わらず美しい姿をとどめる常神。神がおわす神秘の島。父が歩む道のりは、今は曲がりくねっているのかもしれない。常神へと至る、あの長い道のりを思い、私は目を閉じた。

父と私

藤島高等学校 田中 紘子

小さい頃から、母の仕事は忙しく父が面倒を見てくれることが多かった。父の作るご飯は本当に美味しく毎日の夜ご飯がすごく楽しみだった。父は音楽を流しながら料理をしていた。「まだかなあ」と待っている時間が大好きだったことを覚えている。朝は、いつも決まって六時に私と姉を起こしに来てくれた。私はそれが楽しみで、たとえ早く起きたり休日だったりしても、一階にいる父を二階から呼んでいた。

小学校高学年になると、お願いしてヴァイオリンを習い始めた。ある日、高校受験を控えた姉から、下手で耳障りだしうるさいから練習をやめて、と言われた。下手くそで先生に申し訳ないからレッスンを聞いていたくない。そう母にも言われた。自分で弾いていても嫌になるくらいだから当然だろうとは思う。けれど当時の私は、下手だから練習しているのに練習を禁じられたらどうしたらいいんだ。ただただショックでいっぱいだった。しかし私が高校生の今までヴァイオリンを楽しく続けられたのは父のおかげである。もうちょっと練習しろよ、音程があんまり良くないな。そう父に言われたことがあるけれど、父は笑いながら言ってくれたし下手くそだと言われたことは一度もなかった。それに、少しでも上達すると上手くなったなあとか一言だけ心から褒めてくれた。周りの人に下手だと言われても、お前が楽しければそれでいいんだよ、と伝えてくれた。小さい時から、私が泣いている時も頑張っている時も優しく頭をポンポンと叩いて笑いかけてくれる父の温かさが大好きだった。でも、中学生になるとだんだんと反抗期が始まり父にもものすごく冷たい態度をとってしまった。機嫌が悪いと目も合わせずに淡泊な返事しかしない。それなのに父は、毎日私に学校の様子を聞いて話題を振ってくれた。私が自分からたくさん喋った時は凄く嬉しそうに楽しそうに話を聞いてくれた。私はそれがとても嬉しかったのに素直になれず、冷たくしてしまうことがあるまま高校生になった。

その日は、朝に話しかけてくれた父にちゃんと目を見て笑顔で返事をして家を出た。父と話したいなと思って家に帰ってきた。しかし家に灯りはついておらず父が倒れていた。いかないでとすがり付いて泣いたけれどどこか冷静で上の空だった。葬儀場の部屋で一緒にいると何回も何回も動いた気がしてしまう。今にも起きてきて話しかけてくれそうな、胸が呼吸で上下に動いた気がしてならなかった。頬を触るとこんなにすべすべでもちもちだったんだなあ、と思った。私は父のことを一番よく知っているのは自分だと思っている節があった。でも何も知らなかった。私は周りの誰よりも父に出会ったのが遅くて父の人生の半分も一緒にいない。知らないことだらけだ。たかが頬だけけれど私はそう感じて悲しかった。月日が経つと段々と自分の心の中に落ちてきて、自分の心の穴に戸惑いが隠せなかった。私の一

番の味方がいない。喪失感でいっぱいだった。

誰かに吐き出したかった私は担任の元に行った。担任は誠実に私のまともらない話を聞いてくれた。お父さんが残してくれたものを大事にして。自分のために、自分の目を見て、真っ直ぐに伝えてくれる言葉はこんなにも心に浸透するものなのかと驚きと嬉しさが溢れた。真っ暗でどうすればいいのかわからなかった私はスツと心が軽くなるのを感じた。

それからは、父だったら今こう言うだろうと考えながら過ごすことが増えた。振り返ると、父は一度も私を否定したり責めたりしたことがなかった。やりたいように生きると、言葉でも態度でもたくさん伝えてくれた。だから私は父が、「そうするか。面白いな」と笑ってくれるような人生を歩みたい。何かをしようとするんじゃないやなくて、私の心が向く方に楽しそうな方に飛び込んでいきたい。父が私に残してくれたもの、それは私が父の娘であるということ。これからもきつと会いたくてたまらなくて泣くこともあるだろう。でも父が笑ってくれるような日々を過ごしたい。父は私の灯台なのだ。

車とハイヒール

藤島高等学校 川上 真陽

夜中の十二時、外から聞こえる車の駐車する音。これが私のラストスパートの合図だ。私は朝起きるのが苦手だから、夜は少し遅くまで勉強する。しかし、夜の十一時を過ぎたあたりから、猛烈な睡魔に襲われ、布団にもぐりこみたくて仕方なくなるのだ。

毎晩十二時ぐらいに家に帰ってくるご近所さんがいることを知ったのは、今年の八月、いつも通り机に向かって勉強をしていた時だった。とても静かで、真っ暗な窓の外から突然、ピーピーという車が駐車される音を聞いた。その後に、カツカツと響くハイヒール。初めてその音の存在に気づいた時、私は正直「今、帰ってきたんだな」くらいにしか思わなかった。しかし、一度気づいてしまうと、毎晩十二時に聞こえてくるその音が私の中で大きな存在となっていた。

私は、その毎晩遅くに帰ってくる人がどんな人なのかはまったく知らない。年齢も、顔も、どんな仕事をしているのかも。知っているのは、ただ十二時に帰ってくるというだけ。ご飯はもう食べたのだろうか、きつとお風呂はこれからなのだろう、いやまずは着替えなければ。私はよくその人の帰ってからの生活を想像した。そして私は気づいてしまった。この人は、十二時に帰ってきてなお、しなければならぬことが沢山あるのだ。もし、私が、学校がおわり帰ってくるのが十二時だとしたらどうだろう。うん。ものすごく憂鬱だ。もちろん、私とは生活スタイルが違うのだろうから、その人が今の生活をどう思っているのかは分からない。でも、そんなことはどうだっていいのだ。私にとって、あの車の音とハイヒールは自分を奮い立たせてくれるのだから。

私は、十二時に聞こえる車の駐車する音を合図にそれから約三十分間勉強することになっている。帰ってくる人が今からしないといけないことをするように、私も互いに異なる空間で頑張ろうと思うのだ。生活パターンもまるで違う私たちだけれども、確かにその人は私の生活に深く入りこんでいるのだと思う。多くの人が眠っている十二時、あの音の存在に気づいている人は、私だけのような気がする。そして、自分の将来の不安や対人関係の悩みのように、激しく主張することはないけれど毎日確かに存在する小さな音に私は親近感をもっている。また、憧れと力強さを感じずにはいられない。疲れを感じさせない堂々と歩いて響くハイヒールの靴音に私は何度励まされたか分からない。「私は今日もやり切ったわよ。さあ、あなたも頑張りなさい」そんな言葉が聞こえてくるようだ。

私はあの人が返せるだろうか。きつとあの人は私の存在は知らないだろう。私が頑張れるエネルギーの一部になっているなんて知る由もない。だけど私は感謝の気持ちでいっぱいなのだ。

どれだけ考えてもやはり、私にできる一番のことは、今を精一杯頑張ることだと思った。

毎晩の合図を聞きながら、自分の本当の夢を見つけ実現するための努力を欠かさないこと。それが私のできる最大の感謝の表現なのではないか。いつか私が大人になった時、今の私のように精一杯な少年・少女の支えや合図となれるように、今日も私はいつもの合図を待ちながら机へ向かう。

二十歳の贈り物

武生商業高等学校 加藤 萌花

二〇一七年五月十二日金曜日。今日は私の兄の誕生日だ。

学校から帰るといつものように手を洗いう着替えを済ませる。いつものように録画しておいたドラマやバラエティを見ながら、お菓子を食べ、時々宿題をする。兄の誕生日だからといって、特段変わった様子が無い。そんなとき私の家のインターホンが鳴った。「はい」と普段喋る声とは違う、ワントーン上がった声で、母が返事をし、玄関に向かう。玄関から帰ってきた母はダンボールを抱えていた。送り主は兄だった。京都の大学に進学した兄は、私達家族とは離れて暮らしており、夏休みやお正月に帰省するくらいで、なにか荷物を送ってくることはまずない。むしろこっちから、お米やカップ麺、お菓子などを詰め合わせて送っているくらいだ。少々不思議に思いながらダンボールを開けると、そこには二つの財布があった。ぱつと見た瞬間に兄が誰宛てに贈ったのかわかった。父と母だ。母の好きなピンク色の長財布とポケットにさつと入る黒色の折り財布。その時の母の顔は今でも忘れられない。驚きと嬉しさが入り混じったなんとも言えない微妙な表情は、ちょっと面白かった。けして笑ってはいけない場面で笑いそうになる私は気持ちを抑えて、爆笑しない程度に笑った。

京都に進学した兄は、なんて粋なプレゼントをするのかと、その時私はものすごく兄を尊敬した。二十歳の誕生日に両親に財布をプレゼントするなんて、最高にかっこいいと心の底から思った。兄が今度帰ってくるのは夏休みになるだろう。その時に、今思ったことを伝えたいと思った。

それからしばらくして、兄は帰ってきた。久しぶりに見た兄は、茶髪が黒髪になっていて、爽やかさが増していた。そんな兄は、帰ってきた時に、また何か紙袋を持っていた。いつも兄が帰ってくる時には手土産がある。京都の美味しいお菓子だろうか、それとも、地方のお菓子だろうかとワクワクしながら紙袋から出るお菓子を待っていると、思っていたものとはぜんぜん違うものが出てきた。それは、私宛てのプレゼントだ。驚きで頭の中が「？」状態の私が、紙袋の中をのぞくと、それは財布だった。黒色のかっこいい財布で、当時中学生だった私がついていいのかと思うくらい、ハイブランドの財布だった。また頭の中に「？」が増えた私は、「ありがとう」と兄に感謝しつつも大混乱だった。両親にプレゼントしたあと妹の私にまでプレゼントしてくれるのかと、地元にいた頃の兄とはひと味もふた味も違う、男らしい兄がそこにはいた。

それから、三年後、私のもうひとり兄が二十歳になった。その時兄が両親に送ったものは家電だ。オーブン兼電子レンジが我が家には届いた。届いたその日から母は、説明書をつくりと読みながらオーブンを使って料理を振る舞ってくれた。まだ、前のオーブンは勝

手が違い苦戦している様子だが、いつもよりも機嫌がよく楽しそうに料理を作る母だった。こうなっていると、もう私も贈らないわけにはいかない。私達兄弟が繋いできた「二十歳の贈り物」、両親に産んでくれて、育ててくれてありがとうの感謝を伝えるチャンスでもある。普段はなかなか恥ずかしくて直接言葉にすることはあまりないが、贈り物を渡す時には感謝を伝えられるようにしよう。私にはまだ、二年ある。その二年をかけて、両親に最高の贈り物と感謝の気持ちを用意しておこう。少し恥ずかしいが、今からその日が楽しみだ。

今日も家で一人だ。嫌ではないけど、少しだけ寂しい。寝る前のおやすみも朝起きた時のおはようも、いつてらっしゃいの言葉もない。

私の家は母子家庭だ。お母さんが毎日毎日働いてくれている。お母さんは日勤と夜勤を交互に繰り返し働いているので生活リズムが合わない。しかも私のお母さんはブラジル人なので少し日本語は話せるが基本の会話はポルトガル語だ。私は日本で生まれ育ったので圧倒的に日本語の方が喋りやすい。言語が違うと頭も使わないといけないし、言葉の伝わり方や捉えられ方も違うし、伝えたい事をそのまま同じように伝える事が難しい。そのため、お母さんとうまくコミュニケーションをとるのが難しく、お母さんもこれに悩まされ諦めているようだった。そんな私達だが、普通に仲は良いし、二人で切磋琢磨し合いながら必死に生きてきた。日本語の書類や手紙は、私が通訳し記入した。お母さんは車は持っていないがどんなに仕事で夜遅くなっても二十四時間スーパ―へ買い出しに行ってくれたり、私が次の日学校なのに制服を洗い忘れた時には、朝早くに起きて洗濯機を回し、寒い中赤い自転車でコインランドリーに駆けつけ制服を乾かしてくれたりした。

中学の部活の引退試合の一週間前、私はお母さんにバスケをしている姿を一度も見せた事がなかったたので、「最後の引退試合に来てほしい」と伝えた。しかし当日、二階のギャラリーにお母さんの姿はなかった。何度も玄関へ行ってお母さんの靴がないか確認した。結果は一緒だった。みんなが最後の試合で負けて泣いている中、私は違う意味で号泣した。その日に撮ってもらった写真はほとんどぐしゃぐしゃな泣き顔だった。すごく悲しかったし悔しかった。お母さんはその日夜勤から帰ってきてヘトヘトで寝ていたらしい。それは来られなくて当然だ。けれどそれでもすごく悔しかった。私が中学校生活で一番力を入れてきた場所だ。毎日朝練をしていた時期もあったし、試合で何回も負けて何回も仲間達と泣いて、それでもみんなで頑張ってた楽しんできた部活だ。お母さんが毎日毎日仕事で頑張ってたヘトヘトになって帰ってくる事、何も文句を言わずにただひたすら働いて生計を立ててくれている事も私は知っている。けれど私も違う場所で一緒に頑張っていた事を知ってほしかったし、私の努力を見てほしかった。その日から私はお母さんに嫌気がさしてしまった。

ある日、私が学校にいる時、雷警報が出た。生徒が下校する時間になると、大雨になり帰りの会の途中で停電になった。そして雷が鳴り響く中、生徒達の迎えの車で渋滞になった。友達みんなが自分達の車に入っていると、ある友達が「乗せていこっか？」と気を遣ってくれたので、その言葉に甘える事にした。友達の家を迎えを待っている時、大雨の中かっぱを着て赤い自転車に乗ってくる人の姿が見えた。お母さんだ。よく見ると、足が出ていて、いつもお母さんが部屋着としてはいているハーフパンツだった。雷を聞いて急いで来てくれ

たんだらうと思うと目にうるっときてしまった。涙をこらえて「どうしたの？」と聞くと、大きい傘を差し出してきた。「これ持ってきたの」「私、友達の車で帰るって言っちゃった」というと「あっそうなの！」とお母さんは安心した様子で「じゃあ気をつけて帰ってきてね。先帰ってるね」と先に帰って行ってしまった。その後、私は友達の胸の中で泣いてしまった。お母さんが私を気にかけてくれた事、しっかり愛されているんだなと再確認ができてすごく嬉しかった。家へ帰ってお母さんに来てくれてありがとうと伝えると嬉しそうにしてくれた。

よく思い出したら、私は母子家庭で育ち、お互い普段話している言語も違うが、父親がいなくて寂しいと思った事もないし、お金にも困った事がなく、十七年間不自由なく暮らしてこれた。それこそすべてお母さんの努力のおかげだ。きっとお母さんは私の見えない所で努力しているのだらう。私はもっとお母さんを大切にして、これからも二人で協力し合いながら、たくさん感謝を伝えていこうと思った。

追憶

立命館慶祥高等学校 清水 綾乃

瀬戸内海には、島が幾つもある。

自分の目にその海を映して初めて、私はそのことを認識した。空の青さを抽出してばら撒いたような鮮やかな海の上に、その足を地球の底に据えた島々が凜と立ち、こちらを見ていた。

船に乗って移動すると、それら「視線」も追いかけてくるように感じられた。けれど、私の行く先を理解したその島たちは、ゆっくりと私から「視線」を外した。その感覚は人間のそれと似ていた。

しばらく経って、船は到着を告げるように減速していった。

地面は歴史を語る、と私は思う。自然と、自然から離反した人間とが歩んだ歴史を傍観している存在だ。過去の人間の残していった感情もきつと染みこんでいるのだろう。だから私は、それらを私ごときの感情で上書きすることを躊躇した。だが、すでにその時そこには「私ごとき」のためらいが落ちていたのだった。

瀬戸内海には、島が幾つもある。

その美しい島々のひとつ、大島。それがこの島の名前だ。

大島青松園、国立ハンセン病療養所。私はそこを訪れた。外部の人間が上陸するのは、実に一年半ぶりのことであるという。長く人々から差別され続けたハンセン病患者たちは、この島で終生隔離を告げられ、そのほとんどが抵抗の余地なく命の灯火をこの島で消した。その差別の根本的原因是、誤った知識であり誤った方策であった。

島の中にある納骨堂に入ったその時、かすかに寂しさの匂いがして、思わず喉の奥にこみあげるものがあった。お骨の入った包みが、亡くなられた日付の順番に整然と並んでいて、ところどころに数個分の隙間が確認できる。その隙間は故郷へ骨を返すことが出来た方のためのものだと、大島青松園の職員が教えてくれた。裏を返せば、ここにある骨の数だけ身寄りのないままの魂が彷徨っているのだ。

私は納骨堂の中で、亡くなられた方々に合掌しながら、新型コロナウイルスに感染しホテル療養となった時のことを思い出した。

仕切りがはり巡らされた車に乗って指定されたホテルに向かい、一週間ほど外に出ることなく生活した。記憶の限りでは部屋に窓はあったのだと思うが、私は一度も外を見ることができなかった。私の感情を残すことのできない地面に、憧れを抱くことが怖かったからだ。あの時私はたしかに社会からの断絶を感じていた。私のいないところで世界が廻っているような感覚が、幾度も心を傷つけた。嗅覚障害のあった鼻の奥に、ただ寂しさの匂いだけがこびりついていた。

だからなのだろうか。大島の地でふと目線を上げ、海の方こうに別の町が見えた時、心の奥底である時と同じ孤独がうごめいた。私が今立っているこの地面の上で、ハンセン病患者が同じ風景を見た時、いったいどんな思いを抱いたのだろうか。家族への謝罪だろうか。罪悪感だろうか。世間への憤りだろうか。

やはり地面は歴史を語る、と私は思った。

ハンセン病の歴史は非常に残酷で、個人のみならず国単位で作り返してしまつた負の歴史そのものである。

しかし、私たちは過去から学ばなければならない。それこそ、この新型コロナウイルスという小さくて巨大な敵を目の前にして、私たちは過去の過ちを繰り返さないという強い覚悟が必要であつたはずだつた。しかし、特に社会が着実に形を変えていった頃、心ないニュースの数々に思わずため息がもれ出た人も多いのではないだろうか。けれど、私はこの未知なる敵に遅しく立ち向かつていった時代を、悲しい時代とは呼びたくない。だから正しい知識と方法を以て、乗り越えていきたいと切に願うのである。

船が大島から遠ざかっていった時、私はただひたすらに「なんて美しい島なのだ」と感動した。

人間が特別たらしめた島が、人々が、ちょうどあなたと同じように生きている。

瀬戸内海には、大島が在る。

その地面が語る歴史から、目を背けてはならない。

修学旅行みやげ

羽水高等学校 田中 美琴

私には「家の顔」と「学校の顔」がある。ここでは友だちにあまり見せない「家の顔」の私について、文字にしてみようと思う。

「おねえちゃん」と私を呼ぶ幼い声がある。十四歳離れた妹の声だ。その声は、鈴のように明るく楽しそうな時もあれば、どこか不満げで今にも泣きそうな時もある。

十四も離れているんだ。可愛くないわけがない。今回はどこか不満げな妹に私が問う。

「どうしたの」

「おにいちゃんがあ、テレビい、かわってくれない！」

と、この頃たくさん言葉をおぼえ、話すようになった妹からの告げ口が入る。

「へえ…」

自分のなかで戦闘モードのスイッチが入る音がした。

私と妹の間には、私の下に弟があと二人いる。計、四人きょうだいだ。そのトップに君臨するのが私、というわけである。

今回の妹からの告げ口（報告）は、好きな番組を見たかったのにおにいちゃん達がテレビを譲ってくれない、というものだった。

テレビのそばへ行けば、録画してあるバラエティ番組を見ながらゲームをする弟の姿。

「おい、テレビかわってやれって」

なんて、妹に話しかける時よりも一オクターブは低い私の声。ビクツとしてから、あわてリモコンを操作し、妹の好きなものをさがす弟、それが私達きょうだいの日常だ。

「喧嘩するほど仲がいい」という言葉があるが、本当にその通りだ。私達は喧嘩や言い争いを全くしないが、かわりに会話が全くない。加えて弟達は私に怯えている。上の弟の友だちに「こわいお姉ちゃん」と言われたこともある。許せぬ。

きつと弟達は私のことを嫌っているだろう。厳しく、当たりの強い姉。私だってそんな姉は嫌だ。

そんな私達きょうだいにも仲が良かった時期がある。それは、弟達がまだ幼かった頃。私だけが持っていたひとつのゲーム機に顔を寄せ、息がかかるのも気にせず二人でゲームに熱中していた。

やがて互いに成長し、大きくなるにつれ、どんどん会話が減っていき、今ではこのあり様だ。

会話がめっきり少なくなった頃、私は小学校の修学旅行へ行った。いちばん楽しみにしていたのは、生まれて初めて行く、大阪の某アミューズメントパーク。高鳴る鼓動と弾む足。キラキラと輝いていたのは、風景だったか、瞳だったか。

グループでパーク内を歩きまわった後、私達はおこづかいをにぎりしめて、おみやげを買いにいった。

季節が冬に近いということもあり、クリスマスモチーフのグッズが並ぶ中、はじめに目についたのは、二つのマグカップ。某黄色いキャラクターがサンタさんの服に身を包んだ子ども向きのもの。私はそれがどうしても気になった。目が離せなかった。ただのマグカップ、しかし、弟二人の顔が頭に浮かぶのは何故だろう。

買ってしまった。おこづかいをくれた両親には何も買わず、可愛げのない弟へ。

何故買ったんだろう。何故弟の顔が浮かんだんだろう。今になって思えば、普段強く当たる弟らへの罪滅ぼしだったのかもしれない。

家に帰ってから、リビングの机にあのマグカップを置いた。母には弟へのものだと言っておいたから、きっと分かるはずだ。私は弟と顔を合わせないまま自室に入った。

晚ごはんの時間になってリビングへ行くと弟二人がかけよってきた。

「ありがとう…」

よそよそしい、ぎこちないその言葉が、どこかくすぐったかった。

それから数年、上の弟が六年生になり修学旅行へ行った。コロナウイルスの影響で県内の旅行になったようだ。少しか家の中が静かになったが、弟はすぐに修学旅行を終えて帰ってきた。

修学旅行から帰ってきた弟は家族全員に、クッキーを買ってきた。父、母、弟、妹と共にみんなで食べた。

荷物の整理を終えた弟は修学旅行のしおりに、感想を書きはじめた。母と旅の話をしながら、楽しそうに書いていた。

妹、弟たちが寝た頃。ふと、リビングの机の上を見ると弟のしおり。パラパラとめくっていると「マグカップ」という弟の文字。

「それ、あのマグカップもらったのうれしかったで、買おうとしてたんやって。いいのなくて買えんかったらしいけど」と、母。

弟らは今でもマグカップを大切に使ってくれている。私を呼ぶ弟らの声は一ミリも可愛くない。けれど弟は、私の大切な弟だ。ぼかぼかした気持ちで、そう思った。

言葉にできない

藤島高等学校 藪野 幸生

それは秋も終わりに近づき、冬がそこまできている少し肌寒い日曜日の朝だった。夜来の雨は上がり、窓から見る空は青く澄み渡っている。遅い朝食が済んだ後、私は突然、

「浜に行ってみるか」

妹にそう声をかけた。何故だかわからないが、私は無性に行きたかった。妹は寒いことを理由に一人で行けばとか、なんで朝からなのとか言っただけでしぶっていたが結局ついて来た。

玄関の戸を開けた瞬間、冷気とともにまだ何物にも汚されていない清々しい朝の空気が入ってきた。

「朝のにおいだ」

私は思わず深呼吸しながらそう言った。

「雨あがりの朝のいつもの感じだよ」

そう言って妹が笑う。私は言った。

「このにおい、香りがいいんだよなあ」

「気持ちほわかるけど、ロマンチストだね」

私は妹から初めてそう言われて自分はロマンチストなのだろうかと思った。

浜辺には晴れているからか、遊んでいる小学生達や散歩している老夫婦の姿もあった。浜辺の朝の空気は、これ以上ないほど澄んでいた。玄関先で感じたあのにおいに似てはいるが、もっと研ぎ澄まされたものだった。そして、ゆったりと横たわる海からの潮を纏うような穏やかな風は静謐感にあふれていた。

妹が落ちていた細長い枝先で砂浜に何か書き始める姿を見ながら私は、去年の国語の教科書にあったある作品を思い出す。それは『匂いはいつも言葉の奥の何かを』と題された随想だ。この随想を初めて読んだ時、私は驚きと同時に「これだっ」と思った。何故なら私がずっと感じてきた言葉では表現しきれない、香りやにおいによって感じる思いをどうやって表したらいいのだろうかという長い間の自分の疑問に答えてくれていたからだ。

私が見慣れた木々のある風景や、林を渡る風や、季節が移ろうとする頃の街並みや、雨上がりの空や道端に、においや香りを感じるようになったのは小学生の頃だったと思う。そして、そういう事に気づき始めた頃は、においや香りを本当にそう呼んでいいのかもわからなかったし、そのほかの言葉を見つけられないまま過ぎてきた。忘れていることもあったかもしれない。小学校の確か四年生の時だったろうか。家族で東尋坊の別荘あたりをぶらぶら散歩していた時の事だった。今思うと笑い話だが、その時母に私は、

「この林にふく風のおい好き」

と言ったことがあった。母は、

「えっ、なに？ それはさすがすがしいという言い方をするんだよ」

とすかさずそう言ったのだ。私は幼いながらも伝わらないもどかしさを感じた記憶がある。筆者の川上未映子さんが書かれているように、当時の私にとってにおいが嗅ぐものではなく体験するものだったのだと思う。

私がおいと、それがもたらす何かをはっきりと意識したのは、高校生になったばかりのコロナ禍の時期だった。当たり前前のすべてのことが当たり前ではなくなつたあの頃は、どんなに息苦しくてもマスクは絶対に手放せないものだった。六月に入って、初めて登校した時だった。学校の近くで、私は何かの拍子に片方の耳からずるりと外れたマスクをしなおすために立ち止まり、近くに人がいないことを確かめて、マスクを外したのだ。その時、何気なく周りを眺めた。ちょうど太陽が雲の切れ目から顔をだし、あたりは一層明るく輝き始めた。私は瞬間はつとまった。さっきまでマスクをかけ、目だけで自分が見ていたモノクロだった風景に、一瞬鮮やかな色がついたような錯覚を感じたのだ。町に存在するいろいろなにおいや香りが、一気に私に押し寄せてきた。暖かい風のおいは、初夏の訪れを感じさせるのに十分だった。マスクのない顔は沢山のおいやそして風景の色さえもキャッチできる。言葉にできない何か、言葉の奥に内在する言葉以上に神秘をもった何か、そして言葉の源となりうる何かを川上さんは随想で触れている。大切にしていきたい。

暖かくなってきたあとそう言った妹の瞳はキラキラしていた。妹は最近よく笑うようになった。今年三月に希望した高校へ妹は入れなかった。どんなに苦しかっただろう。家族はただ黙って見守るしかできなかった。なんとか自分で立ち上がった妹が今、こうしてここにいる。私のことをロマンチストだという妹。しかし、ロマンチストという言葉でくくれない何か不思議な力が人間にはあるのかもしれない。

冬の足音が聞こえるこの浜辺に吹く風のおいと海のおいは、青い空と寄せては返す波の音とともに妹の脳裏に記憶となつてきつと残るだろう。そして、この先同じようなおいに妹が出会った時、それがたとえこの場所でなくとも、妹はこの日のことをきつと思い出すに違いない。私は久しぶりに優しい気持ちになった。

〈 高校生の部 佳作 〉

弱さと向き合う

福井工業大学附属福井高等学校 三好 なつき

机の引き出しから、一冊のメモ帳が出てきた。何年か前に使っていたものだ。何気なくめくってみると、次の日の時間割、持ち物、友達と遊びに行く日時、など。そして、余白。もう何もないと思って閉じようとしたが、数枚の余白の先に、短い文章が書かれていた。三年前の自分から、私にあてられたものだった。『私はこの春から剣道をするために福井へ行きます。私の決断は間違っていますか。』

最後のインターハイ予選で負けてから、何をしても身が入らない日々が続いた。剣道への情熱も消えかけ、もうやめてしまおうとも思った。そして、毎日のように考えていた。あれだけ稽古してきたのに、あれだけ情熱を注いでいたのに、何故私は負けたのだろうか。

高校二年生の春、コロナウイルスの感染拡大により、学校は休校、寮生は強制帰省、大会は全て中止になった。急に夢を奪われた挙句に、剣道をすることもできない、空白の二ヶ月間を過ごした。学校が再開された後も、コロナは私たちにつきまとい続けた。練習試合は中止、大会も中止。遠征にももちろん行けない。やむを得ない決断だと分かっている。悔しかった。だから私は考えた。もしコロナがなくて、練習試合も大会も出来ていたら、最後は絶対に勝てたはずだ。経験もつめて、チームワークも良くなって、自信ももつとついていたはずだ。だから、コロナが悪い。全部悪い。それから、あの子が悪い。あの子も悪かった。あの時は、あいつが。この時は、こいつが。

大会以来、ずっとそうやって考えていた。あれもこれも全部何かのせいにして、逃げていた。この先何をしたってどうせ失敗する、と自暴自棄にもなった。だから、もしこの時の私が三年前の自分からのメモを見たら、確実に『間違っていた。』と答えただろう。『ここに来たのは間違いだ。コロナ、人間関係、全て上手くいかなかった。』そう返事をしただろう。そんな私に、今の私なら言える。お前はどこまで馬鹿なんや。

たしかにコロナで大変なことになった。予期せぬ事態に何度も戸惑い、不安になった。でも私のチームは、コロナに負けたことなど一度もなかった。先生は私たちに不安を感じさせない強い態度で何度も鼓舞してください、そして私たちも誰一人として諦めず、どんな時も立ち上がってきたはずだ。毎日、毎日、個々にいろいろな想いを持ち、目標を一つに、必死に。高校剣道に命をかけてきた。もちろん、ぬぐいきれない不安や不満もあった。いじけることもすねることもあって、お互いを傷つけたりもした。それでも諦めることなく竹刀を振ってきた。その時できる最大限のことを、全力でやってきた。何度転んでも、立ち上がってきた。

私は最後、自分に負けた。キャプテンとしても人間としても、臆病だったから負けた。キャプテンとして強い態度でチームを鼓舞することができなかった。思ったことを口にでき

る強さがなかった。全部一人でやろうとして、自分以外を信頼する強さがなかった。みんなを不安にさせ、自分自身も不安にさせてしまった。

このことに気がつけたのは、この三年間、私のことを支えてくれた人たちのおかげだ。本当に多くの人に、たくさん助けられてきた。何度もくじけて諦めかけたし、逃げようとしたけれど、それでも立ち上がってこれたのは決して私一人が頑張ってきたからじゃない。家族、仲間、先生、クラスや寮の友達、寮母さん。数え切れない程多くの人に助けられ、影響され、頑張った。これだ。めげずに踏ん張れたのも、大会が終わった後自分の弱さと向き合えたのも、全部周りにいる人のおかげだ。

私はこの経験を決して忘れずに、大人になる。常に、周りの人への感謝を忘れないように。自分の弱さに勝てる人になれるように。そして、自分の弱さを人のせいにはしないように。

それから、私は何も間違っていないかった。剣道をしに福井まで来たこと、福井でたくさんの人と出逢い繋がりを持てたこと、人生をかけて剣道に打ちこんだこと。これらは私のこの先の人生で胸を張れることであり、三年前にしたこの選択に、何も後悔はない。しかし、三年前の自分に返事をするなら、答えは何も言わないこと、だった。まだ何も始まっていないのに、未来の自分に答えを聞くような臆病さに、腹が立ったからだ。想像以上に苦しむことになるし、数え切れない程心が折れる。でも、本気で楽しいから。やる前からびびってんじやねえよ。堂々と来い。日本一になるために。